

研究史

ペルシア戦争の終わりをいつにおくのかということについて、研究者の見解はわかれている。前四七九年のセストスの攻略をもって終わりとする説と、前四四九年のカッリアスの平和をもってペルシア戦争は終わったとする説にわけられる。前者の論拠は、ギリシア本土からのペルシア勢力の一掃をもって、ペルシアの脅威に対するギリシア本土の解放戦争としてのペルシア戦争は終焉したというものである。後者の根拠は、デロス同盟を率いるアテナイの手でペルシア領に対して一連の攻撃が加えられ、前四四九年にカッリアスの平和がアテナイとペルシア王との間に結ばれるまで、止むことがなかったというものである。

軍事史を扱ったラゼンビーLazenby¹は、その本のタイトルが示しているようにペルシア戦争を前四九〇年から四七九年までの時間枠のなかで捉えている。グリーンGreen²は、前四七九年のミュカレの戦いで叙述を終わり、クセノポンXenophonの「私自身に関しては、此処まで書くことで十分としよう。これ以降のことは誰か他の人の問題である」という言葉を引用して締めくくっている³。

*The Oxford Companion to Classical Literature*は、セストスの攻略に終わる前四七九年の事件をもって「ペルシア戦争は終了した」と指摘している⁴。もちろんこれでペルシアとの戦いが終わったわけではないが、これ以降の戦いはwarsではなくstruggleという用語が用いられている。このようにwarsからstruggleへと用語が変えられたのはギリシア人側が「攻撃的」となったためである。

このような用語の違いは碑文の上でも確認される。デルポイに奉納された戦勝感謝の奉納碑文は ton polemon という用語を使っているが、前五世紀中頃のエレクトイス族の戦没者慰霊碑は tei machei という用語が用いられ、同時代人自身がマラトンとサラミスの戦いを中心とするペルシアとの戦争と、それ以降の戦いを区別していたことを示している。

¹ J. F. Lazenby, *The Defence of Greece 490-479 B.C.*, Warminster, 1993.

² P. Green, *The Greco-Persian Wars*, Berkley/Los Angeles/London, 1996.

³ *Ibid.*, p. 287.

⁴ *The Oxford Companion to Classical Literature*, 1974, p. 316, s. v. Persian Wars.